

一・二

【出題意図】

さまざまな情報のある本文から、解答に求められている内容を適切に取捨して論旨を整理することができているか。また、論旨を十分に咀嚼し、自分の考えを本文の内容と関連付けて的確に表現することができているか。

一

【解答例】

この逸話では、家康が、外様の家臣から直接意見をされた際に、それを傾聴し、今後も意見するよう促す様子が描かれる。また、その家臣の非礼と意見の拙さを非難する側近を制止し、むしろ意見した家臣の行動を誉める。その理由は、その者相応によく考え、伝えようとする志が得難いものだからだという。過ちは自分では気づかないもので、それを知るには他人の指摘に頼る他ない。身分が低い者は遠慮なく周りの者と指摘し合って気づくこともできるが、身分が高くなるとそれを指摘する人間がいなくなり、改善の手立てを失う。これは損であり、果ては独善的になり、国を失ったり家を滅ぼしたりすることに繋がることもある。だから自らの悪い点を指摘しようとしてくれるような者は大切にすべきなのだとする。この逸話での家康は、自分の悪い行いに対する指摘を知ることを、危機管理とみなしている。またその内容の小を問題とせず、志に基づいた指摘を、いわば自らの行

いに関する客観的情報と捉えている。なるほど、よい判断を行うためには、信頼性の高い客観的情報をより多く集めること重要であり、誠意に基づいた大小の指摘を冷静にできるだけ多く得、そこから取捨しようとする態度は理にかなっている。筆者はこの点を君主の心得として逸話を通じ示したのである。

(以下は、右の論旨を踏まえた上で各自の意見を適切に述べること。)

二

【解答例】

学問というものは書物を基礎とするものである。一冊の書物を読む時、最初はあまりに簡約に書かれていると感じられることがある。こうした場合、前後の文脈や様々な書物と比較して意味を明らかにするために多くの書物を見ることになる。少しでも欠けている場合は他の書物と比較考察しなければ続き方の間違いも分からない。広く多くの書物に当たらなければ、たとえ一冊の書物でも意味を通じさせることは出来ない。学者たちが広く書物を見ることを大切にすることはこういうわけである。しかし、古代から幾度も戦乱があり、残されている書物は少ない。学者たちはそのわずかな書物を粗雑に自分勝手に読み、「広い知識はかえって心を埋没させてしまう」などと見識の狭いことを言っている。勝れた学者は一つの經典に通じるだけでも満足するが、蔵書家はたとえ万卷あったとしてもまだ足りないと思ふものなのだ。しかし最近の浅学の者たちは蔵書を鬪草のように考え、ただその数を競っている。広い知識が人を惑わせる

のであれば、秦の焚書も学者たちには意味があったことになる。

このように、筆者は多くの書物を比較参照することが学問、つまり書物を読む上で必要不可欠であり、広い知識が心を混乱させるという考えを批判している。

(以下は、右の論旨を踏まえた上で各自の意見を適切に述べること。)